Osaka University Knowledge Archive

Title	帰属意識の変容とエスニシティの意味にかかわる一考察 : ヴィクトリア(Victoria, B.C., Canada)の事例をもとに
Author(s)	吉津, 佑紀
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 183-198
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10138
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

帰属意識の変容とエスニシティの意味にかかわる一考察

―ヴィクトリア（Victoria, B.C., Canada）の事例をもとに―

吉津　佑紀

〈要旨〉

本稿では、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州都ヴィクトリアを事例として、街のもつアイデンティティ変遷について街のアイデンティティの核となる「花」の側面を中心に考察を行う。さらにこの事例分析を通じて、エスニシティ研究において従来看過されがちなひとつの側面について同時に指摘する。一八四〇年代後半から一八六〇年代前半の英国植民地としての背景を持つヴィクトリアは、その後の移民政策や観光政策による重点化もあって、街の持つ「英国性」が街や住民を表わす特異な指標として広く認められるようになっていた。しかしながら、今日の状況を見ると、その「英国性」が同様の役割を果たしているとは考えにくい。むしろ、温暖な住みやすい環境における「ガーデン・シティ」の住民という帰属意識に、住民はさまざまな生活の局面において満足していると考えられる。「花」は、「英国性」と「ガーデン・シティ」両者を結びうる概念なのである。

「英国性」を創造するために利用されていた「花」が、今日においては住民全般の帰属意識の象徴として用いられるようになったこと、すなわち「花」の持つ象徴的意味がいかに変化したのかについて、並びに「ガーデン・シティ」としての帰属意識もエスニシティの一種であることを本稿で提示するものである。

キーワード

ヴィクトリア（B.C., Canada）、エスニシティ、歴史研究、英国性、花

一．はじめに

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州都ヴィクトリアは、英国植民地としての経緯もあって「小さな英国(A Little Bit of Old England)」として長らく知られていた。しかし、今日ではこの「英国的」特質―とりわけイングランド的特質―(以後「英国性」とする)は顕著な形では提示されず、時代錯誤とすら認識されている。住民にとって、今日の街は「花咲き乱れる美しい街」と表現される方がよほど適切で、呼称も「ガーデンシティ(花の街)」が好まれている。この事実は街の観光局のウェブサイトのホームページが「小さな英国」ではなく「ガーデンシティ」を自己表象として用いていることに顕著に表れている(1)。

カナダは、隣国アメリカ合衆国と同様多様なエスニック集団が混在する移民の国である。そのカナダが多民族共生理念として掲げてきたのが、個々の集団の持続性と独立性を認める「人種のサラダボウル」論であった。これは帰属意識統合の理念を掲げた合衆国の「人種のるつぼ」論と比べても、多民族共生の実態を説明しうる有用な理念と考えられている。しかし、筆者が調査したヴィクトリアでは、サラダボウル論にとどまらない「ガーデンシティ」の住民としての帰属意識の共有がさまざまな文脈で見受けられた。このことは、カナダの多民族共生がサラダボウルのように分断されて維持されるのでは必ずしもなく、根本的な帰属意識の統合を通じても実現しうることを如実に示すものと考えられる。しかし、この帰属意識は歴史的に常に存在してきたわけではない。それゆえ今日の住民の帰属意識を理解するには歴史的経過を辿ることが肝要となる。

以上を踏まえて、本稿ではヴィクトリアを事例として、エスニシティ研究の立場から、地域共同体を単位とする帰属意識の変遷について街を特徴付ける「花」の側面から考察する。すなわち、「英国性」から「ガーデンシティ」への表象への変遷過程、花の持つ象徴的意味の変容にかかわる分析を通じて、従来のエスニシティ研究に対しても一つの見解を加えようというものである。

そこで実際に事例を分析する前に、本稿でのエスニシティ理解やヴィクトリアに関わる先行研究の概観を通じて議論の予備知識を示しておこう。

一．一．エスニシティ理論の概要

「エスニシティ」といっても様々な切り口がある。だがエスニシティの意味や本質を問う観点からは吉野が挙げた「原初主義」と「境界主義」の対立構図が一つの手がかりになる[吉野　一九九七：二四](2)。

「原初主義」は、新興国の統合的革命における原初的単位の重要性を指摘したギアツの主張がエスニシティ理論に流用されたものである。エスニシティを実現させる原初主義的紐帯は、地縁や血縁、人種、言語、地域、宗教、慣習の共有を通じて自然に備わった一体感とされる[Geertz 2000(1973): 261-269]。しかし、今日エスニシテ

ィの本質を問う場合は「原初主義」ではなく、バルトによる「境界主義」がその基礎となることが多い。バルトは、本源的要素ではなく自・他を分かつ境界が集団を定義するとし、境界で区分された諸集団の関係性がエスニシティを規定すると主張した[Barth 1969]。つまり、境界主義の焦点とは集団間の関係なのである。エリクセンはこの立場をさらに先鋭化させ、「差異を有した集団間の相互接触がエスニシティの必要条件であり、最小限度の接触があるからこそエスニシティがエスニシティたりえる」とした[Eriksen 1993: 13]。この主張に見られるように、重要となるのは従来「エスニシティ」にほのめかされていた〈民族〉的な要素が、その範疇に含まれていないということなのである。

後述するように、ヴィクトリアの英国性やガーデンシティへの帰属意識も、自・他の関係性から生じたものとして捉えることができる。このことを踏まえると、境界主義的な理解は本稿において有用なツールとなりえる。そこで本稿では、エリクセンの理解を参考に、エスニシティを「『他者』との相互接触と境界構築を通じて現れる集団意識」と定義しておきたい。

一・二・ヴィクトリアにおける先行研究とその課題

ヴィクトリア出身の女性画家エミリー・カーは、自伝 *The Book of Small* の中で、ヴィクトリアを「カナダの中で最も英国の香りの漂う場所」で、「街のほとんどすべての人が英国人。彼らは英国人よりも英国人らしく (more English than the English) あろうとしている」[Carr 2004 (1942): 75, 76] と描写した。カーの上述の表現を題名に用いた街の歴史書もあるように[Reksten 1986]、この表現は多くの住民にとって馴染みのあるものとして受け止められている。

街の英国性は、英国植民地経験や英国民の移民政策、あるいは観光での商品化などの歴史的事実を基にした多くの歴史研究が言及してきたように③自明の事実として捉えられている。しかし、「自明」であるがゆえか、研究の主題として街の英国性は体系的に取り組まれることはこれまでほとんどなかった。ガーデンシティの帰属意識に至っては、学術的レベルでの議論はほとんどされていないのが現状である。したがって、英国性に関わるヴィクトリアの帰属意識について今日改めて問うことは意義があると考えられる。本稿ではこの考察にあたって帰属意識の変遷の媒体となる「花」に関わる領域に注目する。

二・ヴィクトリアの概要

二・一・地理的概略

ヴィクトリアは、カナダ太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア州最西のバンクーバー島南端にある。カナダと合衆国の国境が北緯四九度線に沿って引かれているのに対して、バンクーバー島がファンデフカ海峡をはさみ合衆国にくい込む形で存在しているために、街は北緯四八度二五分の地点に位置している。二〇〇六年の人口統計によると、ヴィクトリア市の人口は七八、〇五七人で、周辺部を

含んだヴィクトリアの広域圏をさす場合はその人口は三三〇、〇八八人となる(4)。ヴィクトリア広域圏は、ヴィクトリア市以外を含むものの、空港や大学、フェリーターミナルなどの生活圏を共有しているという点で、広域圏をもって「ヴィクトリア」と呼ぶ場合が多い。本稿でもこの用法に倣う。

ヴィクトリアの気候は地中海性気候区ないし西岸海洋性気候区に分類される。あるヴィクトリア住民が述べるように、ヴィクトリアの気候は「夏は、晴れ上がった空と降り注ぐ太陽が特徴的で、暖かではあっても暑いと感じることはほとんどなく夜は涼しい。そして冬には雨も降るが、気温は日中一〇度程度、そして夜の気温は〇度かそれよりも少し低い程度である」[Ewing & Bowen 1995: 6](5)。この気候条件こそが、ヴィクトリアをカナダで最も気候的に恵まれた場所として、カナダ内外を問わず多くの人々の憧憬の対象に留める要素なのである。

二・二・歴史的概略 ―三つの時期区分から―

本節では、分析のために便宜的に分けた三期に沿って、それぞれの時期のヴィクトリア史の概略を提示する。この三期は、内容の面から第一期を『英国植民地の砦』、第二期を『英国性の希求』、第三期を『ガーデンシティへの希求』と称する。第一期は毛皮交易を行っていたハドソンベイ会社(以下 HBC とする)によるトレード拠点の建設(一八四三年)からブリティッシュ・コロンビアのカナダ連邦加入(一八七一年)まで、第二期は連邦加入から第二次世界大戦終戦(一九四五年)を経た一九五〇年代後半まで、そして第三期は一九六〇年以降、とりわけカナダ自主憲法成立(一九八二年)以降から今日にいたるまでの時期としておく。以下、それぞれの時期の概要と区分根拠を見てみよう。

二・二・一・第一期 『英国植民地の砦』

一八四三年のバンクーバー島南部への拠点建設の背景には英米間の国境調停問題があった。当時 HBC は、英米合同利用地であった合衆国ワシントン州に拠点を有していたが、この地が調停の過程で合衆国領となることが明らかとなった。そこで、英国利権確保の目的から国境調停後も英国領に残るとされた今日のヴィクトリアの中心地に拠点を移動させたのである[Barman 1991: 43, Ormsby 1971 (1958): 80]。HBC の予見通り、一八四六年のオレゴン条約はバンクーバー島を英国領と認定した。しかし、合衆国の領土拡大論の影響は依然として看過できず、領土確定に伴う損害を補填する必要があったことからもバンクーバー島は英国の直接統治下に入ることになった[Barman 1991: 53]。これが一八四九年のバンクーバー島の植民地化である。しかし様々な制限から、当初の植民地化は不振であった(6)。

この状況を一転させたのが一八五八年のブリティッシュ・コロンビア本土でのゴールドラッシュの起こりである。合衆国を中心として世界中からゴールドシーカーがヴィクトリアに集中し、街は突如として活気溢れた町となった[Reksten 1991: 41]。一方で、合衆国

民のブリティッシュ・コロンビア本土への流入を重く見た英国は、英国権利を明確にするために、本土の植民地化を同年に行った。さらに一八六六年には両植民地を合同植民地ブリティッシュ・コロンビアとして統合させた。しかし、植民地合同や経済不況などから生じた負債の対処や東部で一八六七年に成立したカナダ連邦の要請などが背景となって、合同植民地は一八七一年にカナダ連邦に参入することになった[Barman 1991: 91-98; Lines 1972: 12; Ormsby 1974: 13-16]。これをもって植民地政策は一応の終わりを迎えた。第一期は英国植民地政策の直接的影響がある点から、植民地政策がなくなった他の時期と区別をしたものである。

二・二・二・第二期『英国性の希求』

連邦から申し出された連邦加入の条件に、カナダ東西部を結ぶ大陸横断鉄道の一〇年以内の完成があった。当初この横断鉄道はバンクーバー島に西部の終点を置くこととなっていたが、最終的には技術的な問題から終点は今日のバンクーバーの中心部となるガスタウンに定められた[Barman 1991: 108]。以降、横断鉄道終点の地位を獲得したバンクーバーは急速な発展を遂げたが、その一方、対抗都市の発展のあおりを受けた中心都市ヴィクトリアの経済は不況に追い込まれた。そこで経済打開策として、英国出身者たちの日常のレベルで根付いていた「英国性」を観光資源として活用することが最良の策であると多くの住民が気付くことになったのである[Lines 1973: 14-16]。

それではなぜヴィクトリアに英国性が色濃く存在していたのだろうか。それは、連邦に加入したとはいえ、ロッキー山脈や太平洋、アメリカ国境による隔離的環境にあったブリティッシュ・コロンビア州―とりわけ本土からも隔離されているバンクーバー島―が、英国植民地時代の影響を引きずり続けていたためである。[Ormsby 1971 (1958)：257, 262] さらにこの要素が英国移民を集中的に受け入れる移民政策によって引き続き補完されたため、ヴィクトリアの英国出身者はマジョリティとしての地位を長らくの間保持し続けることができたのである(7)。

しかし、英国性創造の過程は一枚岩ではない。英国性を支えたのは、英国出身者による非英国出身者に対する冷遇と無関係ではないからである。人種主義的な影響を強く受けた英国出身者たちは、中国系、インド系、またはカナダ先住民といった力を持たない集団に対し差別的な態度や発言をもって接したのであり、「英国性」の範疇に当てはまらない集団を排除しようとする気運は街中に満ちていたのである[Barman 1991: 137-149; Fisher 1972: 73-94, 146-174; Ward 2002]。とはいえワードによると、この差別的傾向は、第二次世界大戦終戦(一九四五年)以降、徐々に収束に向かっていったとされている[Ward 2002: xiv]。

第二期は、観光化が推進されたが、それは英国性イデオロギーの高まりの中で展開したという点という観点から、次に述べる第三期とは性格を異にしている。

二・二・三・第三期『ガーデンシティへの希求』

大戦後しばらくした一九六二年の移民改正法では、カナダへの移民条件として人種的背景が不問とされることになった。さらに多文化主義の導入(一九七一年)、カナダ多文化主義法の制定(一九八八年)といった一連の政策を通じて、カナダにおける少数集団への配慮、異なる文化への尊重の念が高まっていた。ウェストミンスター憲章(一九三一年)や英国議会法(一九四九年)で段階的に獲得されたカナダの権利がカナダ法(一九八二年)の制定を経て完全主権を認められるに至ったこともカナダにとって大きな転機となっている。これらの展開を経て、ブリティッシュ・コロンビア州でも—もちろんヴィクトリアでも—生活の様々なレベルで多文化主義的な「カナダ国民」としての帰属意識が意識されるようになり、この展開の中で人種主義も下火となっていったのである。

ブリティッシュ・コロンビア州は大戦後も、引き続き観光産業に大きく依存した経済活動を行っており、とりわけ戦後の合衆国を初めとする各国の旅行ブームを背景に、「公共善」としての観光政策の成果が一層期待されるようになった[Dawson 2004: 153-210]。このように、第三期のヴィクトリアは依然として観光産業に依存した経済活動の展開が見られるものの、観光の方向性のみに関しても第二期と比較して大きな違いが見うけられる(8)。つまり、ここで台頭してくるのが、ガーデンシティとしての帰属意識なのである。

三・事例分析

それでは前節で見た区分をもとに、当該期における英国性と「花」に関わる現象、両者の関係、そしてそれらの意味について、様々な事例を用いて分析を行いたい。

三・一・第一期『英国植民地の砦』

拠点建設から植民地設立までの間、ヴィクトリア統治は英国政府からの委託を受けたHBCが行っていた。大多数の先住民に取り囲まれる環境(9)の中で活動したトレーダーたちは[Ringuette 2004: 20]、交易を通じて人種の枠を越えた交流を行っていた[Fisher 1977]。しかし、拠点である砦の中では、後に植民地の総督ともなるHBC総督ジェームズ・ダグラスのもと、英国の慣習や制度が厳格に取り入れられていた[Reksten 1986: 11]。トレーダーたちの自己認識が依拠する英国性は厳格に維持されていたのである。「英国性」の創造を意識した場所になによりも先ずダグラスが拠点の設立を意図したことを示す。以下の記述が英国性導入の意識の高さをうかがわせる。ダグラスは、拠点の候補地を見るなり、そこを「英国で育てている植物の栽培にふさわしい場所」['The Founding of Victoria' 1943: 6、ただし引用はRinguette 2004: 2]と感じ取り、英国的植生環境の創造の構想を膨らませたのであった。たとえ小規模な拠点であっ

たとはいえ、英国性の導入とその保持は当初より意識された実践であったのである。

また植民地化の段階になると、「英国臣民」のための空間創造、すなわち英国性の創造はより明確な形で提示されるようになった。植民地化に際して、新たに植民地総督に就任したダグラスに指示された以下の方針にその意図は端的に現れている。

> 正常な植民地体系のすべての目的は、新しい基本に基づいた社会の再編成ではない。これは単におろかな試みである。そうではなく、古くからの英国の制度慣行の最も価値があり賞賛されていることがらを新しい国に導入することにある。
>
> [Barclay to Douglas, December 1849、ただし引用は Bowsfield 1979: iii]

この方針にはかつてアメリカ一三植民地の独立を許した英国の苦い教訓が生かされている。新しい英国植民地は、本国の移植と再創造を通じた英国性の導入によってはじめて、帝国の一部たりえると見なされたのである。ここでほのめかされる「導入」されるべき英国的価値の一つこそが本稿で焦点を当てる花の側面なのである。以下、英国性と花の関係について見てみよう。

当時英国では、園芸熱が過熱していたこともあいまって、世界中の草花の収集がプラントハンター(9)を通じて行われていた。一八四二年のナサニエル・ウォードによる「ウォーディアン・ケース」(10)の発明は、植物輸送の際の大波、座礁、塩分、乾燥等の被害の改善に寄与し、園芸志向をさまざまな階級の人びとに浸透させた。国外における英国民も例外ではなく、ヴィクトリアへの船に設置されたウォーディアン・ケースによる本国からの植物の到来を HBC 関係者が心待ちにしていたことや、砦の内部で英国植物を用いたガーデニングが行われていたことも記録として残っている[Kramer 1998: 11, 12]。ではなぜ英国出自者はこのようにガーデニングへ傾倒を示すのだろうか。

この問いを理解するためにはガーデニングの実践が英国的な慣習に根付いていることを理解する必要がある。シードの議論が一つの手がかりとなる。新世界において西洋諸国の植民地支配が儀礼的実践を通じて開始されたが、その正統性は本国の言語、身振りや手振り、そして慣習の展開を通じて顕在化させる必要があった[Seed 1995: 2]。そして英国の場合はフェンスとガーデンに見られる土地利用がその実践に当たるとされる。英国で土地概念が発達しているのは、中世末より近代にかけて英国で展開したエンクロージャーの実践でフェンスや垣根が所有地の境界指標として用いられた過程があるからである。囲まれた土地は所有地として主張はできたが、囲い込むだけで土地所有の正当性を確立することは不十分ともされていたために、ガーデニングが土地活用の証、つまり土地所有の象徴として解釈されるようになったというのである。また、文化的背景を持つ英国民が行うガーデニングが植民地で帯びた意味合いは、「未開」の中での「文明」の創造でもあったともいう[ibid: 16-40]。

本稿で扱うさまざまなガーデニングの事例はシードの主張と決して無関係ではない。なぜなら、英国出身者たちは、「未開」のバンクーバー島に「文明」を作り出す実践としてガーデニングに強い関心を示したからである。なにより、植民地化の過程がこの土地所有とガーデニングに関わる慣習の中から見出せることがその証左である。

土地競争が激しくなることを見越したダグラスの最初の仕事は、先住民からの土地購入条約の締結であった(12)。獲得された土地では入植者がコテージ・ガーデンを築き果物や花々を植えた[Ewing & Bowen 1996: 3]。英国出身の最初の医師のヘルメッケンが回顧録の中で、「家々の周りを花やガーデンでしつらえたことで、その土地は英国のどんな村にも負けないくらい文明化」し、かつて「イングランドやスコットランドにいたときと同じような生活が最も重要なものとして現れるようになった」[Smith 1975: 116]と述べているのも、多くの入植者によっても共有された、花やガーデンの創造が英国性の創造に繋がるとの認識である。彼らの活動によって持ち込まれた多くの草花が、土着の草花の植生を危険にさらしたこともまさにこの表れなのである(13)。

もっともこの時期、圧倒的多数の先住民[Fisher 1981]、各国のゴールドシーカー[Reksten 1986]、中国人労働者[Lai 1988]の存在などに見られる非英国性要素が街に存在していたことは否めない。しかし、英国出自者たちは少なくともガーデニングを通じて自分たちの英国世界の再創造、すなわち「文明」的な英国の植生の普及に努めていたのである。

第一期を通じた英国出身者による花を用いたガーデニング実践は、「英国性」の正当性を主張し、他者を退けるためのエスニック境界の創造の手段として利用されていたのである。

三：二：第二期『英国性の希求』

合同植民地をカナダ連邦に導き入れる条件となった大陸横断鉄道の建設は、ヴィクトリアにとって当初何の益ももたらさなかった。西側の鉄道終点となったバンクーバーの急成長を尻目に、街の経済は不況に追い込まれ打開策の模索を強いられたからである。前述したように、ここで打開策として注目されたのが一八七〇年代の「観光の台頭期」における観光産業の潜在性であり、これはとりわけ合衆国との関わりを通じて見出されたものであった[Lines 1973: 15, 16]。

ボストンとニューヨークの旅行会社「レイモンド・アンド・ホイットコーム社」が開始した南北米大陸への周遊プランの一つのアラスカ周遊ツアーでは、ヴィクトリアが乗客たちの二、三時間の散策の対象地として選ばれた。思いもかけず、ヴィクトリアの「英国的」な外見は合衆国からの観光客から好評を博した。合衆国にはないエキゾチックな雰囲気は、「異なる何か」を観光地に求める観光利用客に刺激を与えるには十分だったのである。こうしてヴィクトリアの経済不振脱却は観光を通じて行われるべきとの認識が住民たちの間で序々に共有されるようになった[ibid.]。

一方で、「非英国性」は人種主義の高まりの中で、一層排除の対象として敵視されるようにもなっていた。街への英国人、白人以外の移民が激減したのは、ブリティッシュ・コロンビア州の状況を踏まえて国家レベルで採用された排他的移民政策が原因の一つである。とりわけ強い迫害の対象に遭ったのが中国人系移民であった(14)。彼らは粗悪な労働環境や安い労賃の下でも従順に働くため、白人労働力よりも労働需要が高く、不況の中で白人労働者の雇用を脅かしたのである。また彼らの異なる文化形態も英国出身者の不快感を買うには十分だったのである[Lai 1988:52-67; Ward 2002: 3-76]。

「非英国性」の排除の事例から読み取るべきは、ヴィクトリアが白人英国人のものだけであって欲しいとする英国出身者の感情の表れであり、この目的達成のため、英国出身者たちは人種主義の下で非英国性を牽制し続けたのである。一九〇〇年代のブリティッシュ・コロンビア州の立法宣言の一つ「ブリティッシュ・コロンビアは英国人のものである」も非英国性排除の事実をよく反映している(15)。

花に関わる実践も、英国性創造との関連の中で捉えなければならない。街の気候が「英国と同じもの」で「アングロサクソン種にとって適切なもの」と強調する当時の移民促進のパンフレット[Sproat 1885: 13, 14]は、ガーデニングの慣習を移民先でも継続できる保証を与えるものである。事実、入植者の大多数がガーデニングを通じた英国環境の創造に従事していた。一九二一年のヴィクトリアの園芸クラブの発足[Ewing & Bowen 1996]も花への意識がヴィクトリア英国出身者の間で結晶化したことの表れである。

ここでガーデニングに従事する三つのヴィクトリアの住民像を描写してみよう。典型像の一つは英国出身のエミリー・カーの父親リチャードである。一八九〇年代に街へやって来た彼は、自分の庭を英国のガーデンに遜色のない英国的なものにすることに余念がなかった。彼は「キバナノクリンザクラ、サクラソウやサンザシの垣、そして英国的な花のみで庭を飾り、(中略) カナダの土着の草花は根こそぎ取り除き、思い通りのできる限りの柔和な英国らしさを実現させていた」[Carr 2004 (1943): 8]。典型像の二つ目はピーター・オライリーである。彼は一八九〇年にヴィクトリア郊外に建てられたポイント・エリス・ハウスに居住したが、彼も英国ガーデンに造詣がある人物で、自分のガーデンにペチュニア、ジニア、ジギタリス、ホワイトライラックなどの色とりどりの花によって英国的なガーデンを築いた[Weishan & Roig 2004: 25, 33]。典型像の三つ目はブッチャート夫妻である。彼らは「英国の花や鳥を自分の庭の中にいっぱいにしたい」との思いのもと、後年にはヒマラヤ山脈、ピレネー山脈、南アフリカのケープ、エジプトのカイロなど様々な場所で花々を収集し移植までも試みた[Preston 1996: 74, 75]。かの有名なブッチャート・ガーデンを創りあげたのも彼らである。

住民たちのガーデニングの成果は外部者の目に留まる対象でもあった。その結果、住民による花の実践は英国性を強調する観光産業の中に効果的に組み込まれた。例えば一九〇四年にヴィクトリア観光局によって出版された観光パンフレット *An Outpost of Empire, Victoria, B.C.* [Cuthbert 1904] の表紙には、花の女神が英国艦隊を背

景に描き出され、俗物的な英国とのつながりが強調された[Daily Colonist 1904 3 13]。また「(英国的な) アフタヌーンティ」とともに色とりどりの花を楽しむことができるブッチャート・ガーデン[Preston 1996: 85] が、ヴィクトリアの主要な観光地として組み込まれ、一九三七年以降には、観光客が最もよく集まるダウンタウン地区の街灯にフラワー・バスケットが英国的な街灯に飾られるようにもなった[Lindsey 1973: 2, 3]。これらは花と英国性、そして観光が密接に関わる顕著な例として挙げることができよう。

花に関わる実践が行われる中、ガーデンシティの表象も徐々に浸透するようになってきた。筆者が聞き取りを行った観光局担当者の話によると、この呼称は観光業者によるものではなく自然発生的なものとのことであった。観光の文脈で街の英国性が強調される中でガーデンシティの呼称が自然発生的に生じたことは、この両者の表象が矛盾するものでなかったことを示している。

本節で見てきたように、この時期の花に関わる実践は、英国性との関連の中で提示されるものであった。このため、花は、英国性として他と峻別が図られたエスニシティを装飾・補完するための要素—更にいえばエスニック境界—として機能していたのである。すなわち、第一期と第二期では植民地政策との関わりにおいて異なっていたが、英国的環境の創造にあたって花を用いていた点では、共通する特徴が存在していたのである。

三・三・第三期 『ガーデンシティへの希求』

第二次世界大戦後、とくに一九六〇年代に入ると、それまで州に蔓延していた人種主義は次第に収束に向かった[Ward 2002: xiv]。排他的移民政策も終了し、人道主義の下で人種主義の反省とマイノリティの権利問題が社会の関心事として現れるようになったのである。この結果、マイノリティは自己主張を積極的に行うことが可能となった。しかしその一方で、従来の特権的要素の英国（イングランド）性は自粛を求めるような社会構造が現れるようになってきた(15)。この構造の中で、マイノリティの損害補償も行われ(16)、社会は様々な文化背景を持つ人々がいかに共存することができるかに関心が集まるようになった。この意識は先述したカナダにおける多文化主義政策の導入、カナダ多文化主義法の制定と決して無関係ではない。

カナダ法制定で獲得されたカナダの英国からの完全独立は、カナダ・アイデンティティの醸成にも大きな影響を与えた。ヴィクトリアでは長らく英国国旗が掲げられていたが、ブリティッシュ・コロンビア州旗（一九六〇年）やカナダ国旗（一九六五年）が制定されると状況は一転、独自の旗が掲揚されるようになった。とりわけピエール・トルドーのカナダ首相在職期（一九六八年四月より一九七九年六月まで、および一九八〇年三月より一九八四年六月まで）には、上述した多文化主義の導入やカナダ国歌の「オー・カナダ」（一九八〇年）の制定などの、カナダ人としての誇りを育む政策が展開した。こうした気運の下では、かつての英国性を主張することは、住民たちにとって時代錯誤にしか映らなくなったのである。

一方、ヴィクトリアの花に関わる側面は、英国性の衰退と対照的

にその存在が前面に押し出されるようになってきた。一九五九年に創刊された州の様々な姿を伝える季刊誌 *Beautiful British Columbia* の創刊号にもヴィクトリアが扱われたが、「英国的」に関わる記述はすでに見られず、ガーデンシティの側面のみが謳われたのである[British Columbia 1959: 45]。

観光の文脈では花に関わる側面がいっそう強調されるようになった。例えば一九六〇年に行われた地域活性化のための花祭りは、ヴィクトリア大学の学生のアイディアが元となったものである[Victoria Daily Times, 1960,4, 26]。このように、英国性との関係性を意識させない花に関わる行事が少なからず見られるようになってくる。ブッチャート・ガーデン、副領事邸ガーデン、アブカジ・ガーデンを始めとするヴィクトリアのガーデン資源が観光パッケージに効果的に組み込まれるようにもなる。

今日ガーデン・ツアーによって、住民によるプライベート・ガーデンも観光の一要素として取り込まれるほどに[18]、多くの住民が身近な環境に様々なガーデンを有してもいるのだが、ここで[19]今日のヴィクトリアでガーデニングが行われる主たる背景、そして花にかかわる社会的動向について指摘しておこう。

住民がガーデニングに傾倒するのは、都市計画による住宅における庭の総面積の広さがあるためである。フロントヤードとバックヤードの総面積が家屋の面積よりも総じて広いため、住民たちは庭でガーデニングなどの独自の余暇活動を楽しむことができるのである。そして、恵まれた気候条件や、周囲の美しいガーデンの存在なども、住民たちのガーデニングの動機付けとなりえている。園芸クラブによる手引き書の「ヴィクトリア地区への新参者は街にあるすばらしいガーデンに魅了され、ガーデニングを始めなければという気になる」[Ewing & Bowen 1995: 6]とする記述はこのことを顕著に示している。

花にかかわる社会的動向としては、過去にはないがしろにされていた土着の花々に関心が集まっていることが認められる。今日では外来種によって植生を脅かされた土着の花々を保護する運動が広く起こっており、副領事邸の一区画やオーク・ベイ地区のネイティブ・ガーデンなどではボランティアによって土着植物のための保護区が創られた。また、白鳥湖のある白鳥公園などの自然公園では、管理されない草花のあり方が見直されている。ここの職員の話によると、土着の花々が近年住民の間で人気があるのだという。英国式ガーデンの手入れの大変な花々と違い、手入れが簡単で育てやすいことがその背景にあるとのことであるが、この社会傾向は「文明」と「未開」の象徴区分に今日では住民たちがこだわりを示していないことの現われである。

また何よりも「フラワー・カウント」と呼ばれる年間行事[20]の起こりこそがヴィクトリアのガーデンシティとしてのアイデンティティ醸成にとりわけ大きな役割を果たしていると考えられる。この行事は、観光局主導で、北米のほとんどが雪に見舞われている二月末に早くも春の花が咲き始めるヴィクトリアの恵まれた気候を外部に発信する目的から、一九七六年より始まったものであり、毎年二

月末に恒例として行われている。住民たちは、自宅の庭や通りの花の数を数え地元のラジオ局に報告し、この集計された結果が公表される。この行事を通じて住民はカナダで一番で過ごしやすい花の街の住民であることを認識するのである[21]。フラワー・カウントは人種・文化的背景とは関係なく、街に住む花に興味のある人なら誰でも参加できる住民参加型行事としての性格を持つものである。

以上が、今日のヴィクトリアでガーデニングが隆盛している背景と花にかかわる社会的動向であるが、これを踏まえて第二期と第三期のヴィクトリアにおける花の機能の変化について記しておこう。

第三期のヴィクトリアで顕著なのが、英国性の衰退に対するガーデンシティの興隆である。第二期までの花は人種主義的な英国性を補完するためのエスニックな比喩の意味が強く込められていたが、第三期の花はこの意味からは自由になっている。もちろん多くの人びとがガーデニングに従事してはいるものの、彼らの動機は「英国出自」としての伝統ではなく、花々の育成に適した気候条件とそれを実行するだけの十分な土地があることに由来している。フラワー・カウントに顕著な住民参加型行事が果たす役割も大きい。この行事で住民が行う作業は、花の数を数えて報告するのみのいたって単純なものである。しかし、自発的に花を数えるという行為、そして自分が報告した花の数がヴィクトリア全体の総和として反映されるという自覚はその都度感じることができよう。単純な行為の連続の中にこそ、ガーデンシティとしての共同体とのつながりが実感されるのである。その結果、〈民族性〉を超えた帰属意識のまとまりが作り出されるのである。

もちろん、かつての花と英国性の関係を再生産する観光業者による表現や、今も残るブッチャート・ガーデンのアフタヌーン・ティーなどは旧来的な意味を想起させないわけではない。しかし、この文脈に見られるヴィクトリアの英国性は、筆者が聞き取りを行った住民の言葉を用いると、「観光産業による演出に過ぎず、現在のヴィクトリアの純粋な姿ではない」[22]。住民の英国性離れは顕著な現象なのである[23]。

第三期、とりわけ今日のヴィクトリア、または住民とっての花は、英国性の縛りから解放され、地域をまとめる新しい自己認識の手段として地域に根付くようになり、英国性の存在というよりもむしろ、この次元を越えたところに結晶化する帰属意識のあり方が重要となっているのである。

四．おわりに

本稿を通じて、ヴィクトリアの英国性の展開を花の側面から分析をした。この分析を通じ、かつては花によってその正当性を保っていた英国性は衰退し、帰属意識の媒体であったものが、今日では対象そのものへ変容したことが指摘できる。これを踏まえると、ヴィクトリアの花に込められた象徴的意味は次のように集約できる。

第一期、第二期のいわゆる「過去」には、花は英国の自然観、ガーデニングの伝統という英国の象徴として機能していた。その花は非

英国性に対しては開かれておらず、その恩恵を享受したのはほかならぬ「英国出身者」のみであった。したがって、花は「排除の象徴」として、英国人と非英国人のエスニック境界として機能していたといえる。これに対して、第三期の「現在」は、花は排除の性格はもはや有しておらず、恵まれた気候条件による地域自慢やその優越感を象徴する地域活性の一端を担うものなのである。したがって、花はもはや英国性の象徴としてのみで見ることはできない。今日の花は英国性との関係の残滓を有しつつも、さまざまな背景を持つ住民たちが構成する地域統合の象徴として認められているのであり、「包摂の象徴」としての性格を強く持つようになっているものである。

エスニシティ研究の主要論者の一人であるアブナー・コーエンは、エスニシティの類型として、従来ではエスニシティとして見られなかった「利益集団」という対象をも含め[Cohen 1974: xvii]、この用法は通常は受け入れられないと但し書きを加えつつも、「英国の都市居住者（City men）もエスニック集団である」[ibid.:xxi] と主張した。従来のエスニシティ研究での「エスニシティ」定義をめぐる潮流のために、彼はこのような控えめな表現をしたのであろう。しかし、彼の言及したものは典型的な「エスニシティ」と呼ぶべきなのである。これがエスニシティの意味に関して本稿が主張したかった見解である。本稿が設定したエスニシティの定義「『他者』との相互接触と境界構築を通じて現れる集団意識」から見てみると、コーエンのエスニシティ解釈は極めて妥当なものに映るのではないだろうか。またこの定義のもとで本稿のヴィクトリアの事例を改めて見てみると、英国性もガーデンシティも、実は同様のエスニシティであることが理解できる。この二者の違いは、英国性ではヴィクトリア内部の英国出身者と非英国出身者の間で境界が引かれていたのに対し、ガーデンシティではヴィクトリア内部者と外部者の間に境界が引かれていた。ただそれだけのことなのである。

以上本稿で論じてきたように、ヴィクトリアでは、かつてはエスニシティの齟齬を生じさせていた花がそれを乗り越えるために今日では用いられるようになっていることが明らかとなった。この試みは現在のところ総じて成功を収めているといえる。この事例に見られる帰属意識、エスニシティの変遷は多民族共生の可能性を考える上で示唆的な現象であると筆者は強く感じている。

注

（1）http://www.tourismvictoria.com/Content/EN/128.asp

（2）ただし、筆者はこの「原初主義」と「境界主義」は対立軸で捉えるべきではないと考える。この議論については別の機会に譲りたい。

（3）ヴィクトリアの歴史書をすべて紹介することはできないが、代表的なオームズビーやバーマンの研究も英国とヴィクトリアの関係を詳しく論じている [Ormsby 1971[1958]; Barman 1991]。

（4）http://www12.statcan.ca/english/census06/data/profiles/community/index.cfm?Lang=E

（5）http://www.worldweather.org/

（6）一八五二年までに、四三五名の移民のみ、土地購入事例も十一しかなかった [Andrew Colvile to Pakington 1852、ただし引用は Fisher 1977:

58]。この不振の原因はマッキーに詳しい[Mackie 1992: 10-13]。

(7) 一九〇一年から一九七一年までにかけてのヴィクトリア市の人口統計によると、英国出自者の割合が常に七割を越えており、最も割合が高かったのは一九四一年次のもので八三・七パーセントである。

(8) ここでの「違い」は英国性についてである。ラインズの議論がなされた一九七三年では、英国性は観光業者にとって依然として用いられ「存在していた」[Lines 1972: 88]。だが、筆者が聞き取りを行ったヴィクトリア観光局の広報担当者が「英国性はもはや観光の主たる対象ではない」と言及したように、今日の状況を同様に判断はできない。人種主義の転換を軸にとった第三期は当然その当初は今日的な状況と相違がある。だが今日的状況に推移していることを踏まえ、本稿で焦点に絞る第三時期の特徴とは英国性が観光産業においても重視されなくなりつつある今日的状況についてであることを強調しておきたい。

(9) 一八六二年の天然痘によって彼らの総人口が激減してしまうことも付記しておく[Yarmie 1968]。

(10) 「植物のもつさまざまな面の魅力にひきつけられて、人類史がはじまって以来、人跡未踏の奥地や遠く海外へ植物採集に出かけた人々」[白幡二〇〇五: 12]と定義される。

(11) 詳細は白幡[2005: 100-107]を参照。

(12) 彼は一八五〇年から一八五四年の間に、対象地の先住民と一四の土地購入条約を締結した[Duff 1969; Tennant 1990:17-25]。

(13) 副総督邸の原生植物保護区の前に看板が立っており、「新しくやって来た入植者が持ち込んだユーラシア系の植物が土着の植生に最も深刻な被害を及ぼした」と入植者による無配慮な植物移植のさまを示している。

(14) 中国系移民の抑制に顕著である。一八八五年より、カナダに入国する中国人一人に対し、五〇ドルの人頭税を課すも、効果が表れず、結局一九〇三年までには五〇〇ドルの支払いを求めた。また英国臣民であるはずのインド人にも、彼らはヴィクトリアの気候や文化に適応することができないとし移民を拒んだ[Lai 1979]。

(15) ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館の学芸員の話によると、第二次ボーア戦争時における英国愛国心の高まりの中で、帝国からの庇護を求めるために発言されたものとのことである。

(16) このように筆者が考える根拠は、筆者が現地滞在中に観察したヴィクトリア・デーやカナダ・デーの光景に見受けられた。紙面の関係上この詳細は別の機会に譲りたい。

(17) 例えば、一八八八年の日系移民への補償や、ニシガ族への土地権承認などが挙げられる。

(18) Victorian Garden Tours: http://www.victoriangardentours.com/

(19) この事実は、ミルネスによるヴィクトリアにあるプライベート・ガーデンのカタログからも読み取ることができる。ミルネスによる紹介は三二点と限られたものであるが[Milnes 1995]、ガーデンがカタログの対象となる事実こそ、いかに街にガーデンが存在するのかを物語っている。

(20) Victoria Flower Count Vancouver Island: http://www.victorialodging.com/flowers/index.html

(21) ちなみに、二〇〇六年には一、七六六、六九八、八六八個の花が報告された。

(22) 観光局の戦略担当者によると「ヴィクトリアの観光では英国性はもはや主たる焦点とはなっていない」とのことであり、住民と観光業者の間で観光の方向性、あるいは英国性への認識の相違が見受けられるが、これはまた別の問題である。

(23) 詳細は別の機会に譲りたい。

参考文献

Barman, Jean, 1991, *The West Beyond the West*, University of Toronto Press.

Barth, Fredrik, 1969, "Introduction". In F. Barth(ed.), *Ethnic Groups and Boundaries,* Little Brown own and Co: 9-38.

Bowsfield, Hartwell (ed.), 1979, *Fort Victoria letters, 1846-1851*, Hudson's Bay Record Society.

British Columbia, 1959, "Victoria, Sooke and Vancouver Island's Holiday Playground", in *Beautiful British Columbia,* Vol. 1, No. 1, Summer 1959: 44, 45.

Carr, Emily, 2004(1943), *The Book of Small,* Fitzhenry & Whiteside.

Cohen, Abner, 1974, 'Introduction', in A. Cohen (ed.) *Urban Ethnicity*, Tavistock Publications: ix-xxiv.

Cuthbert, Herbert, 1904, *An Outpost of Empire, Victoria,* B.C, Tourist Association of Victoria.

Dawson, Michael, 2004, *Selling British Columbia: Tourism and Consumer Culture,* 1890-1970, UBC Press.

Duff, Wilson, 1969 "The Fort Victoria Treaties", *BC Studies* 3 (Fall 1969): 3-57.

Eriksen, Thomas, 2002, *Ethnicity and Nationalism (2nd ed),* Plute Press.

Ewing, J. & S. Bowen, 1995, *Gardening Victoria: Tips and Techniques,* Victoria Horticultural Society.

――, 1996, *Hortscrap Book* 1921-1996, Victoria Horticultural Society.

Fisher, Robin, 1997, *Contact and Conflict,* UBC Press.

Geertz, Clifford 2000(1973), "The Integrative Revolution: Primordial Sentiments and Civil Politics in the New States" in *The Interpretation of Cultures,* Basic Books: 255-310.

Lai, David, 1988, *Chinatowns: Towns within Cities in Canada,* UBC Press.

――, 1979 'Ethnic Groups' in *Vancouver Island - land of contrasts,* Charles N. Forward (ed.),: Dept. of Geography, Uvic: 23-47.

Lines, Kenneth, 1972, *A Bit of Old England: The Selling of Tourist Victoria,* M. A. Thesis, Department of History, Uvic.

Lindsey, Horace, 1973, *Victoria's Hanging Flower Baskets,* Victoria Parks Dept.

Mackie, Richard, 1993 "The Colonization of Vancouver Island, 1849-1858," *BC Studies* 96: 3-40.

Milnes, Lynne, 1995, *In a Victoria Garden,* Orca Book Publishers.

Ormsby, Margaret, 1971(1958), *British Columbia: A History*, Macmillian.

Prestor, Dave, 1996, *The Story of Butchart Garden*, Highline Pub.

Reksten, Terry, 1986, *More English than the English,* Orca Book Publishers.

Ringuette, Janis, 2004, *Beacon Hill Park history: 1842-2004,* J. Ringuette.

白幡洋三郎 一九九五、『プラントハンター』講談社。

Smith, Dorothy, 1975, *The Reminiscences of Doctor John Sebastian Helmcken,* UBC Press.

Sproat, Malcolm, 1875 *British Columbia information for emigrants,* the agent-general for the province.

Tennant, Paul, 1990, *Aboriginal Peoples and Politics: The Indian Land Question in British Columbia,* 1849-1989, UBC Press.

Yarmie, Andrew, 1968, 'Smallpox and the BC. Indians', *BCLQ* 31: 13-21.

Ward, Peter, 2002, *White Canada Forever* (3rd edition), McGill-Queen's University Press.

Weishan, M. & C.Roig, 2004, *From a Victorian Garden,* Viking.

吉野耕作 一九九七、『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会。

A Consideration on Identity Transition and Ethnicity
—From the Case Study of Victoria, B.C., Canada—

YOSHIZU Yuki

This paper will discuss the identity transition of Victoria, the capital city of British Columbia, Canada, mainly through a core concept of "flowers", while pointing out one of the connotations of ethnicity that has been tended to be overlooked in earlier research. Victoria went through a period of colonization as part of the British Empire between the late 1840s and the early 1860s. The influence of this lingered during the following several decades not only due to the pseudo-ethnic sentiments of people with English origin but also for the sake of tourism. Considering the local situation today, however, it is hard to insist that there is the same representation of Englishness, or moreover, that it is "A little bit of old England." Local residents rather appear satisfied with living in the region with the mildest climate in Canada and the representation of "A Garden City" or "The best Blooming City". The concept "flowers" can be considered to work as a bridge between these two regional identities: "Englishness" and "A Garden City." Although flowers used to be taken advantage of for creating Englishness in the past, they are now the core medium of creating the new identity of "A Garden City". Through an analysis of this transition, this paper will clarify the symbolic meanings attached to flowers from a symbol of exclusion to a symbol of inclusion. Also, this will argue that residents' identity of "A Garden City" should be regarded as one category of ethnicity.

Key Words : Victoria (B.C., Canada), Ethnicity, History, Englishness, Flowers